

化鳥

泉鏡花

青空文庫

第一

愉おも快しろいな、愉おも快しろいな、お天てん氣きが悪わるくつて外そとへ出でて遊あそべなくつても可いや、笠かさを着きて蓑みのを着きて、雨あめの降ふるなをびしよ／＼濡ぬれながら、橋はしの上うへを渡わたつて行くのは猪いのしだ。

菅すが笠がさを目ま深ぶかに冠かぶつて※に濡ぬれまいと思おもつて向むか風ひかぜに俯うつ向むいてるから顔かほも見みえない、着き

て居ゐる蓑みのの裾すそが引ひ摺きつて長ながいから脚あしも見みえないで歩ある行ゆくて行く、背せの高たかさは五ご尺しゃくばかり

あらうかな、猪いのし子ししては大おほなものよ、大おほ方かた猪いのし中なかつの王わう様さまが彼あんな様さん三さん角かく形けいの冠かんを被むり

市まちへ出でて来きて、而そして、私わたしの母おつか様さんの橋はしの上うへを通とほるのであらう。

トかう思おもつて見みて居ゐると愉おも快しろい、愉おも快しろい、愉おも快しろい。

寒さむい日ひの朝あさ、雨あめの降ふつて居ゐる時とき、私わたしの小ちひさな時じ分ぶん、何いつ日じつでししたつけ、窓まどから顔かほを出だして見みて

居ゐました。

「母おつか様さん、愉おも快しろいものが歩ある行ゆくて行くよ。」

爾その時とき母おつか様さんは私わたしの手て袋ぶくろを拵こしらへて居ゐて下くだすつて、

「さうかい、何なにが通とほりました。」

「あのウ猪。」

「さう。」といつて笑つて居らしやる。

「ありや猪だねえ、猪の王様だねえ。」

母様。だつて、大いんだもの、そして三角形の冠を被て居ました。さうだけれども、

王様だけれども、雨が降るからねえ、びしよぬれになつて、可哀想だつたよ。」

母様は顔をあげて、此方をお向きで、

「吹込みますから、お前も此方へおいで、そんなにして居ると衣服が濡れますよ。」

「戸を閉めやう、母様、ね、こゝん処の。」

「いゝえ、さうしてあけて置かないと、お客様が通つても橋錢を置いて行つてくれません。づるいからね、引籠つて誰も見て居ないと、そゝくさ通抜けてしまひますもの。」

私は其時分は何にも知らないで居たけれども、母様と二人ぐらしは、この橋錢で立つて行つたので、一人前幾于宛取つて渡しました。

橋のあつたのは、市を少し離れた処で、堤防に松の木が並むで植はつて居て、橋の袂に榎の樹が一本、時雨榎とかいふのであつた。

此この樓のきの下したに箱はこのやうな、小ちひさな、番ばん小ご屋やを建たてゝ、其そこ處にに母おつかさん様と二ふた人たりで住すんで居ゐたの
 で、橋はしは粗そ造ぞうな、宛まるで然で、間まに合あはせといつたやうな拵こしらえ方かた、杭くいの上うへへ板いたを渡わたして竹たけを欄らん
 干んにしたばかりのもので、それでも五ご人にんや十じゅう人にんぐらゐ一いつ時ときに渡わたつたからツて、少すこし揺ゆ
 れはしやうけれど、折をれて落おつるやうな憂きづ慮かひはないのであつた。

ちやうど市まちの場ば末すに住すむでる日ひ傭よう取とり、土ど方かた、人にん足そく、それから、三さん味み線せんを弾ひいたり、太た
 鼓こを鳴ならして飴あめを売うつたりする者もの、越あ後ち獅し子じやら、猿さる廻まはし
 を謡うたふものだの、元もつと結とよりだの、早はや附つけ木ぎの箱はこを内ない職しよくにするものなんぞが、目め貫ぬきの
 市まちへ出でて行ゆく往ゆき歸かへりには、是ぜ非ひ母おつかさん様の橋はしを通とほらなければならぬので、百ひゃく人と二に百ひゃく
 人にんづゝ朝あさ晩ばん販ん人にん通とほりがある。

それからまた向むかふから渡わたつて来きてこの橋はしを越こして場ば末すの穢きたない町まちを通とほり過すぎると、野の原はらへ出で
 る。そこん處ところは梅ばい林りんで上うへの山やまが桜さくらの名めい所しよで、其その下したに桃もも谷たにといふのがあつて、谷たに間あひ
 の小こ流ながれには、菖あやめ浦う、燕かきつばた子た花いが一杯いっぱい咲さく。類ほ、白しろ、山やま雀がら、雲ひばり雀などが、ばら／＼に
 なつて唄うたつて居ゐるから、綺きれい麗れいな着き物ものを着きた問とひや屋むすめの女をんなだの、金かね満もち家いんきよの隠ひそ居ごだの、瓢ひさごを腰こしへ
 提さげたり、花はなの枝えだをかついだりして千ち鳥どり足あしで通とほるのがある、それは春はるのことで、夏なつにな
 ると納すずみ涼みだといつて人ひとが出でる、秋あきは茸たけが狩かりに出で懸かけて来くる、遊ゆう山さんをするのが、皆みんな内うちの橋はしを

通らねばならない。

この間も誰かと二三人づれで、学校のお師匠さんが、内の前を通つて、私の顔を見たから、丁寧にお辞儀をすると、おや、といったきりで、橋銭を置かないで行つてしまつた。

「ねえ、母様、先生もづるい人なんかねえ。」
と窓から顔を引込ませた。

第二

「お心易立なんでしやう、でもづるいんだよ。余程さういほうかと思つたけれど、先生だといふから、また、そんなことで悪く取つて、お前が憎まれでもしちやなるまいと思つて黙つて居ました。」

といひく、母様は縫つて居らつしやる。
お膝の前に落ちて居た、一ツの方の手袋の格恰が出来たのを、私は手に取つて、掌にあてゝ見たり、甲の上へ乗ツけて見たり、

「母様、先生はね、それでなくつても僕のことを可愛がつちやあ下さらないの。」
と訴へるやうにいひました。

かういつた時に、学校で何だか知らないけれど、私がものをいつても、快く返事をおしでなかつたり、拗ねたやうな、けんどんなやうな、おもしろくない言をおかけであるのを、いつでも情いと思ひ／＼して居たのを考へ出して、少し驚いで来て俯向いた。

「何故さ。」

何、さういふ様子の見えるのは、つひ四五日前からで、其前には些少もこんなことはありはしなかつた。歸つて母様にさういつて、何故だか聞いて見やうと思つたんだ。けれど、番小屋へ入ると直飛出して遊んであるいて、帰ると、御飯を食べて、そしちやあ横になつて、母様の氣高い美しい、頼母しい、温当な、そして少し痩せておいでの、髪を束ねてしつとりして居らつしやる顔を見て、何か談話をしい／＼、ぱつちりと眼をあいてるつもりなのが、いつか其ままで寝てしまつて、眼がさめると、また直支度を済まして、学校へ行くんだもの。そんなこといつてる隙がなかつたのが、雨で閉籠つて淋しいので思ひ出した序だから聞いたので、

「何故だつて、何なの、此間ねえ、先生が修身のお談話をしてね、人は何だから、

世の中に一番えらいものだつて、さういつたの。母様違つてゐるわねえ。」

「むゝ。」

「ねツ違つてゐるワ、母様。」

と揉くちやにしたので、吃驚して、ぴつたり手をついて畳の上で、手袋をのした。横に皺が寄つたから、引張つて、

「だから僕、さういつたんだ、いゝえ、あの、先生、さうではないの。人も、猫も、犬も、それから熊も皆おんなじ動物だつて。」

「何とおつしやつたね。」

「馬鹿なことをおつしやいつて。」

「さうでしやう。それから、」

「それから、だつて、犬や猫が、口を利きますか、ものをいひますか。ツて、さういふの。いひます。雀だつてチツチツチツで、母様と父様と、兎と朋達と皆で、お話をしているじやありませんか。僕眠い時、うつとりしてる時なんぞは、耳ン処に来て、チツチツチてであつた時分からいひました。犬も猫も人間もおんなじだつて。ねえ、母様、だねえ母様、いまに皆分るんだね。」

第三

母^{おつかさん}様は莞爾^{にっこり}なすつて、

「あゝ、それで何かい、先生^{せんせい}が腹^{はら}をお立ちのかい。」

そればかりではなかつた。私が^{わたし}児^こ心^{こころ}にも、アレ先生^{せんせい}が嫌^{いや}な顔^{かほ}をしたなト斯^かう思^{おも}つて取^とつたのは、まだモ少し種^{すこ}々なこと^{いろん}をいひあつてからそれから後^{あと}の事^{こと}で。

はじめは先生^{せんせい}も笑^{わら}ひながら、ま、あなたが左様^{さうおも}思^{おも}つて居^ゐるのなら、しばらくさうして置^おきまじやう。けれども人間^{にんげん}には智恵^{ちゑ}といふものがあつて、これには他^{ほか}の鳥^{とり}だの、獣^{けだもの}だのといふ動物^{どうぶつ}が企^{だうぶつ}て及^{およ}ばない、といふことを、私が^{わたし}川^{かは}岸^{ぎし}に住^すまつて居^ゐるからつて、例^{れい}をあ

げておさとしてあつた。
釣^{つり}をする、網^{あみ}を打^うつ、鳥^{とり}をさす、皆人^{みんな}の智恵^{ちゑ}で、何^なにも知^しらない、分^{わか}らないから、つられ

て、刺^さされて、たべられてしまふのだトかういふことだつた。
そんなことは私聞^{わたしき}かないで知^しつて居^ゐる、朝晩^{あさばん}見^みて居^ゐるもの。
橋^{はし}を挟^{はさ}んで、川^{かは}を溯^{さかのぼ}つたり、流^{なが}れたりして、流^{なが}れ網^{あみ}をかけて魚^{うを}を取^とるのが、川^{かは}中^{なか}に手^て

あぐら 拱かいて、ぶる／＼ふるへて突立つてゐるうちは顔のある人間だけれど、そらといつて
みづもぐ 水に潜ると、逆になつて、水潜をしい／＼五分間ばかりも泳いで居る、足ばかりが
み 見える。其足の恰好の悪さといつたらない。うつくしい、金魚の泳いでる尾鰭の姿や、
すゐぎんいろ ぴら／＼と水銀色を輝かして刎ねてあがる魩なんぞの立派さには全然くらべものになる
のぢやあない。さうしてあんな、水浸になつて、大川の中から足を出してる、そんな
にんげん 人間がありますものか。で、人間だと思ふとをかしいけれど、川ん中から足が生へ
たのだと、さう思つて見て居るとおもしろくツて、ちつとも嫌なことはないの、つまら
ない観世物を見に行くより、ずつとましなのだつて、母様がさうお謂ひだから私はさ
う思つて居ますもの。

それから、釣をしてますのは、ね、先生、とまた其時先生にさういひました。
あれは人間ぢやあない、簞なんぞ、御覧なさい。片手懷つて、ぬうと立つて、笠を冠つ
てゐる姿といふものは、堤坊の上に一本占治茸が生へたのに違ひません。
ゆふがた 夕方になつて、ひよろ長い影がさして、薄暗い鼠色の立姿にでもなると、ま
す／＼占治茸で、づ／＼と遠い／＼処まで一ならびに、十人も三十人も、小さいのだの、大
きいののだの、短いのだの、長いのだの、一番橋手前のを頭ににして、さかり時は毎日

五六十本も出来るので、また彼処此処に五六人づゝも一団になつてゐるのは、千本しめぢツて、くさくさに生へて居る、それは小さいのだ。木だの、草だのだと、風が吹くと動くんだけれど、茸だから、あの、茸だからゆつさりとしもしませぬ。これが智恵があつて釣をする人間で、些少も動かない。其間に魚は皆で優々と泳いでゐて居ますわ。

また智恵があるつて口を利かれないから鳥とくらべツこすりや、五分五分のがある、それは鳥さしで。

過日見たことがありました。

他所のおぢさんの鳥さが来て、私ん処の橋の詰で、榎の下で立留まつて、六本めの枝のさきに可愛い頬白が居たのを、棹でもつてねらつたから、あらくツてさういつたら、叱ツ、黙つて、黙つてツて恐い顔をして私を睨めたから、あとじさりをして、そツと見て居ると、呼吸もしないで、じつとして、石のやうに黙つてしまつて、かう据身になつて、中空を貫くやうに、じりツと棹をのばして、覗つてゐるのに、頬白は何にも知らないで、チ、チ、チツチツてツて、おもしろさうに、何かいつてしやべつて居ました。其をとうく突いてさして取ると、棹のさきで、くるくると舞つて、まだ烈しく声を出し

て啼ないてるのに、智恵ちゑのあるおぢさんの鳥とりさしは、黙だまつて、鰯どげう 掴つかみにして、腰こしの袋ふくろ中なかへ捻ねぢり込こむで、それでもまだ黙だまつて、ものもいはないので、のつそりいつちまつたことがあつたんで。

第四

頬ほ白しろは智恵ちゑのある鳥とりさしにとられたけれど、囀さへづつてましたもの。ものをいつて居ゐましたもの。おぢさんは黙だまりで、傍そばに見みて居ゐた私わたしまでものをいふことが出来できなかつたんだもの、何もくらべこして、どつちがえらいとも分わかりはしないつて。

何なんでもそんなことをいつたんで、ほんとうに私わたしさう思おもつて居ゐましたから。でも其それを先せん生せいが怒おこつたんではなかつたらしい。

で、まだくいろんなことをいつて、人間にんげんが、鳥とりや獣けだものよりえらいものだとかういつておさとしであつたけれど、海うみ中なかだの、山奥やまおくだの、私わたしの知しらない、分わからない処ところのことばかりたとへ引ひいていふんだから、口くち答こたへは出来できなかつたけれど、ちつともなるほどと思おもはれるやうなことはなかつた。

だつて、私母様のおつしやること、虚言だと思ひませんもの。私の母様がうそをいつて聞かせますものか。

先生は同一組の小児達を三十人も四十人も一人で可愛がらうとするんだし、母様は私一人可愛いんだから、何うして、先生のいふことは私を欺すんでも、母様がいつて聞かせのは、決して違つたことではない、トさう思つてゐるのに、先生のは、まるで母様のと違つたこといふんだから心服はされないぢやありませんか。

私が頷かないので、先生がまた、それでは、皆あなたの思つてゐる通りにして置きましよう。けれども木だの、草だのよりも、人間が立優つた、立派なものであるといふことは、いかな、あなたにでも分りましよう、先づそれを基礎にして、お談話をしやうからつて、聞きました。

分らない。私さうは思はなかつた。

「あのウ母様、だつて、先生、先生より花の方がうつくしうございますツてさう謂つたの。僕、ほんとうにさう思つたの、お庭にね、ちやうど菊の花が咲いてるのが見えたから。」

先生は束髪に結つた、色の黒い、なりの低い頑丈な、でくく肥つた婦人の方で、

わたし
私がさういふと顔を赤うした。それから急にツ、ケンドンなものいひおしだから、大方
其が腹をお立ちの源因であらうと思ふ。

「母様、それで怒つたの、さうなの。」

母様は合点々々をなすつて、

「おう、そんなことを坊や、お前いひましたか。そりや御道理だ。」

といつて笑顔をなすつたが、これは私の悪戯をして、母様のおつしやること肯かな

い時、ちつとも叱らないで、恐い顔しないで、莞爾笑つてお見せの、其とかはらなかつ

た。

さうだ。先生の怒つたのはそれに違ひない。

「だつて、虚言をいつちやあなりませんつて、さういつでも先生はいふ癖になあ、ほん

とうに僕、花の方がきれいだと思ふもの。ね、母様、あのお邸の坊ちんの青だの、紫

だの交つた、着物より、花の方がうつくしいつて、さういふのね。だもの、先生なんざ

。

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前でいふではありません。お前と、母様のほ

かには、こないゝこと知つてゐるものはないのだから、分らない人にそんなこといふと、

怒おこられますよ。唯ただ、ねえ、さう思おもつて、居ゐれば、可いのだから、いつてはなりませんよ。可いかい。そして先せん生せいが腹はらを立たつてお憎にくみだつて、さういふけれど、何なにそんなことがありま
すものか。其それは皆みんなお前まへがさう思おもふからで、あの、雀すずめだつて餌えさを与やつて、拾ひろつてゐるのを見み
嬉うれしさうだと思おもへば嬉うれしさうだし、頬ほ白しろがおぢさんにさゝれた時とき悲かなしい声こゑだと思おもつて見み
れば、ひいゝゝいつて鳴ないたやうに聞きこえたぢやないか。
それでも先せん生せいが恐こはい顔かほをしておいでなら、そんなものは見みて居ゐないで、今いまお前まへがいつた、
其そのうつくしい菊きくの花はなを見みて居ゐたら可いでしやう。ね、そして何なにかい、学がく校かうのお庭にはに咲さいて
るのかい。」

「あゝ沢山たくさん。」

「ぢやあ其その菊きくを見みやうと思おもつて学がく校かうへおいで。花はなにはね、ものをいはないから耳みみに聞き
えないでも、其そのかはり眼めにはうつくしいよ。」
モひとつ不ふ平へいなのはお天てん氣きの悪わるいことで、戸おもて外へにはなかゝ雨あめがやみさうにもない。

第五

また顔を出して窓から川を見た。さつきは雨脚が繁くつて、宛然、薄墨で刷いたやう、堤防だの、石垣だの、蛇籠だの、中洲に草の生へた処だのが、点々、彼方此方に黒ずんで居て、それで湿っぽくつて、暗かつたから見えなかつたが、少し晴れて来たからものゝ濡れたのが皆見える。

遠くの方に堤防の下、石垣の中ほどに、置物のやうになつて、畏つて、猿が居る。

この猿は、誰が持主といふのでもない、細引の麻縄で棒杭に結えつけてあるので、あの、占治茸が、腰弁当の握飯を半分与つたり、坊ちやんだの、乳母だのが袂の菓子分けて与つたり、赤い着物を着て居る、みいちゃん、紅雀だの、青い羽織を着て居る吉公の目白だの、それから邸のかなりやの姫様なんぞが、皆で、からかいに行つては、花を持たせる、手拭を被せる、水鉄砲を浴びせるといふ、好きな玩弄物にして、其代何でもたべるものを分けてやるので、誰といつて、きまつて、世話をする、飼主はないのだけれど、猿の餓えることはありはしなかつた。

時々、悪戯をして、其紅雀の天窗の毛を撈つたり、かなりやを引掻いたりするところがあるので、あの猿松が居ては、うっかり可愛らしい小鳥を手放にして戸外へ出しては置けない、誰か見張つてでも居ないと、危険だからつて、ちよいと縄を解いて放

して遣つたことが幾度もあつた。

放すが疾いか、猿は方々を駆ずり廻つて勝手放題な道楽をする、夜中に月が明い

ときらもんた、時寺の門を叩いたこともあつたさうだし、人の庖厨へ忍び込んで、鍋の大きいと飯櫃を

おほやね大屋根へ持つてあがつて、手掴で食べたこともあつたさうだし、ひらくと青いなか

あかきれら紅い切のこぼれて居る、うつくしい鳥の袂を引張つて、遙かに見える山を指して気絶さ

したこともあつたさうなり、私の覚えてからも一度誰かが、繩を切つてやつたことがあつ

た。其時はこの時雨榎の枝の両股になつて居る処に、仰向に寝転んで居て、鳥の脛

をつかまを捕へた、それから畚に入れてある、あのしめぢ蕈が釣つた、沙魚をぶちまけて、散々悪

るふざけ巫山戯をした揚句が、橋の詰の浮世床のおぢさんに掴まつて、顔の毛を真四角に鋏ま

れた、それで堪忍をして追放したんださうなのに、夜が明けて見ると、また平時の処

ばうぐひに棒杭にちやんと結へてあつた。蛇籠の上の、石垣の中ほどで、上の堤防には柳の切

株がある処。

またはじまつた、此通りに猿をつかまへて此処へ縛つとくのは誰だらうくツて、一し

きり騒いだのを私は知つて居る。

で、此猿には出処がある。

其は母様が御存じで、私にお話しなすつた。

八九年前のこと、私がまだ母様のお腹の中に小さくなつて居た時分なんで、正月、春のはじめのことであつた。

今は唯広い世の中に母様と、やがて、私のものといつたら、此番小屋と仮橋の他にはないが、其時分は此橋ほどのものは、邸の庭の中の一ツの眺望に過ぎないのであつたさうで、今市の人が春、夏、秋、冬、遊山に来る、桜山も、桃谷も、あの梅林も、菖蒲の池も皆父様ので、頬白だの、目白だの、山雀だのが、この窓から堤防の岸や、柳の下や、蛇籠の上に居るのが見える、其身体の色ばかりが其である、小鳥ではない、ほんとうの可愛らしい、うつくしいのがちやうどこんな工合に朱塗の欄干のついた二階の窓から見えたさうで。今日はまだおいひでないが、かういふ雨の降つて淋しい時などは、其時分のことをいつでもいつてお聞かせだ。

第六

今ではそんな楽しい、うつくしい、花園がないかはり、前に橋銭を受取る筈の置いて

ある、この小さな窓から風がはりな猪だの、奇跡な簾だの、不思議な猿だの、まだ其他に人の顔をした鳥だの、獣だのが、いくらでも見えるから、ちつとは思出になるトいつちやあ、アノ笑顔をおしなので、私もさう思つて見る故か、人があるいて行く時、片足をあげた処は一本脚の鳥のやうでおもしろい、人の笑ふのを見るに獣が大きな赤い口をあけたよと思つておもしろい、みいちやんがものをいふと、おや小鳥が囀るかトさう思つてをかしいのだ。で、何でもおもしろくツてをかしくツて吹出さずには居られない。

だけれど今しがたも母様がおいひの通り、こないゝことを知つてるのは、母様と私ばかりで何うして、みいちやんだの、吉公だの、それから学校の女の先生なんぞに教へたつて分るものか。

人に踏まれたり、蹴られたり、後足で砂をかけられたり、苛められて責まれて、熱湯を飲ませられて、砂を浴せられて、鞭うたれて、朝から晩まで泣通しで、咽喉がかれて、血を吐いて、消えてしまひさうになつてゐる処を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑はれて、慰にされて、嬉しがられて、眼が血走つて、髪が動いて、唇が破れた処で、口惜しい、口惜しい、口惜しい、口惜しい、畜生め、獣め、ト始終さう思つて、五年も八年も経たなければ、真個に分ることではない、覚えられることではないんださ

うで、お亡^{なく}なすつた、父^{おとつさん}様トこの母^{おつかさん}様とが聞いても身震^{みぶるひ}がするやうな、そう
いふ酷^{ひど}いめに、苦^{くる}しい、痛^{いた}い、苦^{くる}しい、辛い^{つら}い、慘^{さん}刻^{こく}なめに逢^あつて、さうしてやうくお
分^{わか}りになつたのを、すつかり私^{わたし}に教^{おし}へて下^{くだ}すつたので。私^{わたし}はたゞ母^{かあ}ちゃんくゝてツて母^{おつか}
様^{さん}の肩^{かた}をつかまいたり、膝^{ひざ}にのつかつたり、針箱^{はりばこ}の引^ひ出^{きだし}を交^まぜかへしたり、物^{もの}さし
をまはして見^みたり、縫^{おし}裁^{ごと}の衣服^{きもの}を天窓^{あたま}から被^{かぶ}つて見^みたり、叱^{しか}られて逃^にげ出^だしたりして居^ゐ
て、それでちやんと教^{をし}へて頂^{いたゞ}いて、其^{それ}をば覺^{おほ}えて分^{わか}つてから、何^{なん}でも鳥^{とり}だの、獸^{けだもの}だの、草^{くさ}
だの、木^きだの、虫^{むし}だの、簞^{きのこ}だのに人^{ひと}が見^みえるのだからこんなおもしろい、結^け構^{つかう}なことは
ない。しかし私^{わたし}にかういふいゝことを教^{をし}へて下^{くだ}すつた母^{おつかさん}様^は、とさう思^{おも}ふ時^{とき}は鬱^{ふさ}ぎま
した。これはちつともおもしろくなくつて悲^{かな}しかつた、勿^{もつ}体^{たい}ないときう思^{おも}つた。
だつて母^{おつかさん}様^がおろそかに聞^きいてはなりません。私^{わたし}がそれほどの思^{おも}ひをしてやうくお前^{まへ}
に教^{をし}へらるゝやうになつたんだから、うかつに聞^きいて居^ゐては罰^{ばち}があたります。人^{にん}間^{げん}も鳥^て
獸^{うちゆう}も草^{さうもく}木^{もく}も、混^{こん}虫^{ちゆう}類^{るゐ}も皆^{みな}形^{かたち}こそ変^{かは}つて居^ゐてもおんなじほどのものだといふこと
を。

トかうおつしやるんだから。私^{わたし}はいつも手^てをついて聞^ききました。
で、はじめの内^{うち}は何^どうしても人^{ひと}が鳥^{とり}や、獸^{けだもの}とは思^{おも}はれないで、優^{やさ}しくされれば嬉^{うれ}しかつた、

叱しかられると恐こはかつた、泣ないてると可か哀あい想さうだつた、そしていろんなことを思おもつた。其そのたびにさういつて母おつかさん様さんにきいて見るみ卜な何なに、皆みな鳥なりが囀さへづつてゐるんだの、犬いぬが吠ほえるんだの、あの、猿さるが齒はを剥むくんだの、木きが身みぶるいをするんだのとちつとも違ちがつたことはないツて、さうおつしやるけれど、矢やつぱり張はりさうばかりは思おもはれないで、いぢめられて泣ないたり、撫なでられて嬉うれしかつたりしいゝしたのを、其その都つど度おつかさん母おつかさん様さんに教をしへられて、今いまじやあモウ何なんとも思おもつて居ゐない。

そしてまだ如あゝ彼ぬ濡ぬれては寒さむいだらう、冷つめたいだらうと、さきのやうに雨あめに濡ぬれてびしょ／＼行ゆくのを見みると氣きの毒どくだつたり、釣つりをして居ゐる人ひとがおもしろさうだとさう思おもつたりなんぞしたのが、此この節せつじやもう唯たゞ變へんな簞きだ、妙めうな猪いぬしの王わう様さまだと、をかしいばかりである、おもしろいばかりである、つまらないばかりである、見みつともないばかりである、馬ば鹿か々々しいばかりである、それからみいちやんのやうなのは可か愛あいらしいのである、吉きち公かうのやうなのはうつくしいのである、けれどもそれは紅べに雀すずめがうつくしいのと、目め白しろが可か愛あいらしいのと些ちつと少ちがも違ちがひはせぬので、うつくしい、可か愛あいらしい。うつくしい、可か愛あいらしい。

第七

また憎らしいのがある。腹立たしいのも他にあるけれども其も一場合に猿が憎らしかつたり、鳥が腹立たしかつたりするのとはけりは無ないので、煎ずれば皆をかしいばかり、矢張噴飯材料なんで、別に取留めたことがありはしなかつた。

で、つまり情を動かされて、悲む、愁うる、楽しむ、喜ぶなどいふことは、時に因り場合に於ての母様ばかりなので。余所のものは何うであらうと些少も心には懸けないやうに日ましにさうなつて来た。しかしかういふ心になるまでには、私を教へるために毎日、毎晩、見る者、聞くものについて、母様がどんなに苦勞をなすつて、丁寧に親切に飽かないで、熱心に、懇に噛むで含めるやうになすつたかも知れはしない。だもの、何うして学校の先生のはじめ、余所のものが少々位のこと、分るものか、誰だつて分りやしません。

処が、母様と私とのほか知らないことをモ一人他に知つてゐるものがあるさうで、始終母様がいつてお聞かせの、其は彼処に置物のやうに畏つて居る、あの猿―あの猿の旧の飼主であつた―老父さんの猿廻だといひます。

さつき私がいつた、猿に出処があるといふのはこのことで。

まだ私^{わたし}が母^{おつかさん}様のお腹^{なか}に居^ゐた時分^{じぶん}だツて、さういひましたつけ。

はつ^{はつ}初^ひ卯^おの日^ひ、母^{おつかさん}様^{さん}が腰^{こし}元^{もと}を二人^{ふたり}連れて、市^{まち}の卯^う辰^{たつ}の方^{はう}の天神^{てんじん}様^{さま}へお参^{まゐ}りなすつて、

晩^{ばん}方^が帰^{かへ}つて居^ゐらつしやつた、ちやうど川^{かは}向^{むか}ふの、いま猿^{さる}の居^ゐる処^{ところ}で、堤^{どて}坊^{うへ}の上^{うへ}のあ

柳^{やなぎ}の切^き株^{かり}に腰^{こし}をかけて猿^{さる}のひかへ綱^{づな}を握^{にぎ}つたなり、俯^{うつむ}向^むいて、小^{ちひ}きくなつて、肩^{かた}で呼^い吸^き

をして居^ゐたのが其^{その}猿^{さる}廻^{まはし}のぢいさんであつた。

おほかたいま、べにすゞめ、大方^{おほ}今^けの紅^{べに}雀^{すゞめ}の其^{その}姉^{ねえ}さんだの、頬^ほ白^{じう}の其^{その}兄^{にい}さんだのであつたらうと思^{おも}はれる、男^{をとこ}

だの、女^{をんな}だの七八^よ人^{にん}寄^よつて、たかつて、猿^{さる}にからかつて、きやあくゝいはせて、わあくゝ

笑^{わら}つて、手^てを拍^うつて、喝^{かつ}采^{さい}して、おもしろがつて、をかしがつて、散^{さん}々^{ざん}慰^ゐむで、そら菓^{くわ}

子^{わし}をやるワ、蜜^{みかん}柑^なを投^なげろ、餅^{もち}をたべさすワツて、皆^{みんな}でどつさり猿^{さる}に御^ご馳^ち走^{さう}をして、暗^{くら}く

なるとどやくゝいつちまつたんだ。で、ぢいさんをいたはつてやつたものは、唯^{ただ}の一人^{いちにん}も

なかつたといひます。

あはれだと思^{おも}ひなすつて、母^{おつかさん}様^{さん}がお銭^{あし}を恵^{めぐ}むで、肩^{ショール}掛^きを着^きせておやんなすつたら、

ぢいさん涙^{なみだ}を落^{おと}して拜^{をが}むで喜^{よろ}こびましたつて、さうして、

あゝ、奥^{おく}様^{さま}、私^{わたし}は獣^{けだもの}になりたうございます。あいら、皆^{みんな}畜^{ちく}生^{しやう}で、この猿^{さる}めが夥^なかま

でござりましよう。それで、手^て前^{まへ}達^{たち}の同^{どう}類^{るゐ}にものをくはせながら、人^{にん}間^{げん}一^{いつ}疋^びの私^{わたし}

には目を懸けぬのでござります トさういつてあたりを睨むだ、恐らくこのぢいさんなら
 分るであらう、いや、分るまでもない、人が獣であることをいはないでも知つて居やうと
 さういつて母様がお聞かせなすつた、

うまいこと知てるな、ぢいさん。ぢいさんと母様と私と三人だ。其時ぢいさんが
 其まんまで控綱を其処ん処の棒杭に縛りツ放しにして猿をうつちやつて行かうとした
 ので、供の女中が口を出して、何うするつもりだつて聞いた。母様もまた傍からま
 あ捨児にしては可哀想でないかつて、お聞きなすつたら、ぢいさんにやくと笑つたさ
 うで、

はい、いえ、大丈夫でござります。人間をかうやつといたら、餓ゑも凍ゑもしやう
 けれど、獣でござりますから今に長い目で御覧じまし、此奴はもう決してひもじい目に逢
 ふことはござりませぬから

トさういつてかさね／＼恩を謝して分れて何処へか行つちまひましたツて。
 果して猿は餓ゑないで居る。もう今では余程の年紀であらう。すりや、猿のぢいさんだ。
 道理で、功を経た、ものゝ分つたやうな、そして生まじめで、けろりとした、妙な顔をし

て居るんだ。見えるく、雨の中にちよこなんと坐つて居るのが手に取るやうに窓から見えるワ。

第八

朝晩見馴れて珍らしくもない猿だけれど、いまこんなこと考え出していろんなこと思つて見ると、また殊にものなつかしい、あのおかしな顔早くいつて見たいなど、さう思つて窓に手をついてのびあがつて、ぶくと肩まで出すと※がかゝつて、眼のふちがひやりとして、冷たい風が頬を撫でた。

爾時仮橋ががた／＼いつて、川面の小糠雨を掬ふやうに吹き乱すと、流が黒くなつて颯と出た。トいつしよに向岸から橋を渡つて来る、洋服を着た男がある。

橋板がまた、がツたりがツたりいつて、次第に近づいて来る、鼠色の洋服で、鉦をはづして、胸を開けて、けぼくしう襟飾を出した、でつぷり紳士で、胸が小さくツて、下腹の方が図ぬけにはずんでふくれた、脚の短い、靴の大きな、帽子の高い、顔の長い、鼻の赤い、其は寒いからだ。そして大跨に、其遅い靴を片足づゝ、やりち

がへにあげちやあ歩行いて来る、靴の裏の赤いのがぽつかり、ぽつかりと一ツづゝ此方から見えるけれど、自分じやあ、其爪さきも分りはしまい。何でもあんなに腹のふくれた人に臍から下、膝から上は見たことがないのだとさういひます。あら！ あら！ 短服へ来て鼻眼鏡をはづした、※がかゝつて曇つたと見える。

で、衣兜から半拭を出して、拭きにかゝつたが、蝙蝠傘を片手に持つて居たから手で、空けやうとして咽喉と肩のあひだへ柄を挟んで、うつむいて、珠を拭ひかけた。

これは今までに幾度も私見たことのある人で、何でも小児の時は物見高いから、そら、婆さんが転んだ、花が咲いた、といつて五六人だかりのすることが眼の及ぶ処にあれば、必ず立つて見るが何処に因らずで場所は限らない、すべて五十人以上の人が集會したなかには必ずこの紳士の立交つて居ないといふことはなかつた。

見る時にいつも傍の人を誰か知らつかまへて、尻上りの、すました調子で、何かものゝいて居なかつたことは殆んど無い、それに人から聞いて居たことは曾てないので、いつでも自分で聞かせて居る、が、聞くものがなければ独で、むゝ、ふむ、といったやうな、承知したやうなことを独言のやうでなく、聞かせるやうにいつてる人で、母様

も御存じで、彼は博士ぶりといふのであるとおつしやつた。

けれども鰯ではたしかにない、あの腹のふくれた様子といったら、宛然、鰯鰯に肖て居るので、私は蔭じやあ鰯鰯博士とさういひますワ。此間も学校へ参観に来たことがある。其時も今被つて居る、高い帽子を持つて居たが、何だつてまたあんな度はづれの帽子を着たがるんだらう。

だつて、眼鏡を拭かうとして、蝙蝠傘を顔で押へて、うつむいたと思ふと、ほら、帽子が傾いて、重量で沈み出して、見てるうちにすつぽり、赤い鼻の上へ被さるんだもの。眼鏡をはづした上で帽子がかぶさつて、眼が見えなくなつたんだから驚いた、顔中帽子、唯口ばかりが、其口を赤くあけて、あはて、顔をふりあげて、帽子を揺りあげやうとしたから蝙蝠傘がぼつたり落ちた。落ちちると勢よく三ツばかりくるくるとまつた間に、鰯鰯博士は五ツばかりおまはりをして、手をのぼすと、ひよいと横なぐれに風を受けて、斜めに飛んで、遙か川下の方へ憎らしく落着いた風でゆつたりしてふわりと落ちるト忽ち矢の如くに流れ出した。

博士は片手で眼鏡を持つて、片手を帽子にかけたまゝ烈しく、急に、殆んど数へる違がな

いほど靴のうらで虚空を踏むだ、橋ががた／＼と動いて鳴つた。

「母様、母様、母様」

と私は足ぶみをした。

「あい。」としづかに、おいひなすつたのが背後に聞こえる。

窓から見たまゝ振向きもしないで、急込んで、

「あらく流れるよ。」

「鳥かい、獣かい。」と極めて平気でいらつしやる。

「蝙蝠なの、傘なの、あら、もう見えなくなつたい、ほら、ね、流れツちまひました。」

「蝙蝠ですと。」

「あゝ、落つことしたの、可哀想に。」

と思はず嘆息をして呟いた。

母様は笑を含むだお声でもつて、

「廉や、それはね、雨が晴れるしらせなんだよ。」

此時猿が動いた。

第九

ひとまはり
一廻くるりと環にまはつて前足をついて、棒杭の上へ乗つて、お天気を見るのであらう、仰向いて空を見た。晴れるといまに行くよ。

母様は嘘をおつしやらない。

博士は頻に指しをして居たが、口が利けないらしかった、で、一散に駆けて、来て黙つて小屋の前を通らうとする。

「おぢさんく。」

と厳しく呼んでやつた。追懸けて、

「橋銭を置いて去らつしやい、おぢさん。」

とさういつた。

「何だー！」

一通の声ではない、さつきから口が利けないで、あのふくれた腹に一杯固くなるほど詰め込みくして置いた声を、紙鉄砲ぶつやうにはぢきだしたものらしい。

で、赤い鼻をうつむけて、額越に睨みつけた。

「何か」と今度は応揚である。

わたしへんじ
私は返事をしませんでした。それは驚いたわけではない、恐かったわけではない。鮫鰐
にしては少し顔がそぐはないから何にしやう、何に肖て居るだらう、この赤い鼻の高いの
に、さきの方が少し垂れさがつて、上唇におつかぶさつてゐる工合といったらない、魚
より獣より寧ろ鳥の嘴によく肖て居る、雀か、山雀か、さうでもない。それでもないト
かんが 七面鳥に思ひあたつた時、なまぬるい音調で、
考えて しちめんちやう おも

「馬鹿め。」

といひすてにして沈んで来る帽子をゆりあげて行かうとする。

「あなた。」とおつかさんが屹とした声でおつしやつて、お膝の上の糸屑を細い、白い、
指のさきで二ツ三ツはじき落して、すつと出て窓の処へお立ちなすつた。

「渡をお置きなさらんではいけません。」

「え、え、え。」

といつたがぢれつたさうに、

「僕は何じやが、うゝ知らんのか。」

「誰です、あなたは。」と冷で。私こんなのをきくとすつきりする、眼のさきに見える気

にくわないものに、水をぶつかけて、天窓から洗つておやんなさるので、いつでもかうだ、

極^{きは}めていゝ。

鮫^{あんかう}鰯^{はら}は腹^{はら}をぶく／＼さして、肩^{かた}をゆすつたが、衣兜^{かくし}から名刺^{めいし}を出^だして、笊^{ざる}のなかへまつすぐに恭^{うやうや}しく置^おいて、

「かういふものじや、これじや、僕^{ぼく}じや。」

といつて肩書^{かたがき}の処^{ところ}を指^{ゆびさ}した、恐^{おそ}ろしくみぢかい指^{ゆび}で、黄金^{きん}の指輪^{ゆびわ}の太^{ふと}いのをはめて居^ゐる。手^てにも取^とらないで、口^{くち}のなかに低^{こゝろ}声^{こゝろ}におよみなすつたのが、市^し内^{ない}衛^{えい}生^{せい}会^{かい}委^ゐ員^{いん}、教^{きやう}育^{うく}談^{だん}話^わ会^{かい}幹^{かん}事^じ、生^{せい}命^{めい}保^ほ險^{けん}会^{かい}社^{しゃ}々^々員^{いん}、一^{いっ}六^{ろく}会^{かい}々^々長^{ちやう}、美^び術^{じゆつ}奨^{しやう}励^{れき}会^{かい}理^り事^じ、大^{だい}日^{にっ}本^{ぽん}赤^{せき}十字^{じふじ}社^{しゃ}社^{しゃ}員^{いん}、天^{あま}野^の喜^{きた}太^{たらう}郎^{らう}。

「この方^{かた}ですか。」

「うゝ。」といつた時^{とき}ふつくりした鼻^{はな}のさきがふらく／＼して、手^てで、胸^{むね}にかけた赤^{せき}十^{じふ}字^じの徽^{きしやう}章^{ちやう}をはぢいたあとで、

「分^{わか}つたかね。」

こんどはやさしい声^{こゑ}でさういつたまゝまた行^ゆきさうにする。

「いけません。お払^{はらひ}でなきやアあとへお帰^{かへ}んなさい。」とおつしやつた。先^{せん}生^{せい}妙^{めう}な顔^{かほ}をしてぼんやり立^たつてたが少^{すこ}しむきになつて、

「えゝ、こ、細いのがないんじやから。」

「おつりを差上げましよう。」

おつかさんは帯のあひだへ手をお入れ遊ばした。

第十

母様はうそをおつしやらない、博士が橋銭をおいてにげて行くと、しばらくして雨が晴れた。橋も蛇籠も皆雨にぬれて、黒くなつて、あかるい日中へ出た。榎の枝からは時々はら／＼と雫が落ちる、中流へ太陽がさして、みつめて居るとまばゆいばかり。

「母様遊びに行かうや。」

此時鉾をお取んなすつて、

「あゝ。」

「ねい、出かけたつて可の、晴れたんだもの。」

「可けれど、廉や、お前またあんまりお猿にからかつてはなりませんよ。さう、可塩梅にうつくしい羽の生へた姉さんが何時でもいるんぢやありません。また落つこちやうも

んなら。」

ちよいと見^み向^むいて、清^すい眼^めで御^ご覧^{らん}なすつて莞^に爾^つしてお俯^{うつ}向^むきで、せつせと縫^ぬつて居^ゐらつしやる。

さう、さう！ さうであつた。ほら、あの、いま頬^ほつぺたを搔^かいてむくく濡^ぬれた毛^けからいきりをたて、日向^{ひな}ぼつこをして居^ゐる、憎^{にく}らしいツたらない。

いまじやあもう半^{はん}年^{とし}も経^たたらう、暑^{あつ}さの取^とつき晩^{ばん}方^か頃^{ごろ}で、いつものやうに遊^{あそ}びに行^いつて、人^{ひと}が天^あ窓^{たま}を撫^なで、やつたものを、業^が畜^ふく、悪^{わる}巫^ふ山^{ふざ}戯^けをして、キツく歯^はを剥^むいて、

引^ひ搔^{つか}きさうな権^{けん}幕^{まく}をするから、吃^び驚^{つくり}して飛^と退^びかうとすると、前^{まへ}足^{あし}でつかまへた、放^{はな}さないから力^{ちから}を入れて引^ひ張^{っぱ}り合^あつた奮^はみであつた。左^{ひだり}の袂^{たもと}がびりりと裂^さけてちぎれて取^とれ

たはづみをくつて、踏^ふ占^みめた足^{あし}がちやうど雨^{あま}上^{あが}りだつたから、堪^たまりはしない、石^{いし}の上^{うへ}を這^{すべ}つて、ずるくと川^{かは}へ落^おちた。わつといつた顔^{かほ}へ一^{ひと}波^{なみ}かぶつて、呼^い吸^きをひいて仰^{あをむ}向け

に沈^{しづ}むだから、面^{めん}くらつて立^たたうとするとまた倒^{たふ}れて眼^めがくらむで、アツとまたいきをひいて、苦^{くる}しいので手^てをもがいて身^{からだ}軀^{うご}を動^{うご}かすと唯^{ただ}どぶんくと沈^{しづ}むで行^ゆく、情^{なさけ}ないと思^{おも}つ

たら、内^{うち}に母^{おつか}さん様^{さん}の坐^{すは}つて居^ゐらつしやる姿^{すがた}が見^みえたので、また勢^{いき}ついたけれど、やつぱりどぶむくと沈^{しづ}むから、何^どうするのかなと落^{おち}着^ついて考^{かん}へたやうに思^{おも}ふ。それから何^{なん}のこ

とだらうと考えたやうにも思はれる、今に眼が覚めるのであらうと思つたやうでもある、
何だか茫乎したが俄に水の中だと思つて叫ばうとすると水をのんだ。もう駄目だ。

もういかんとあきらめるトタンに胸が痛かつた、それから悠々と水を吸つた、するとう

つとりして何だか分らなくなつたと思ふと澆と糸のやうな真赤な光線がさして、一

中あかるくなつたなかにこの身軀が包まれたので、ほつといきをつくつと、山の端が遠く

見えて私のからだは地を放れて其頂より上の処に冷いものに抱へられて居たやうで、

大きなうつくしい眼が、濡髪をかぶつて私の頬ん処へくつゝいたから、唯縋り着いてじ

つと眼を眠つた「眠つた」に「ママ」の注記」覚がある。夢ではない。

やつぱり片袖なかつたもの、そして川へ落こちて溺れさうだつたのを救はれたんだつて、

母様のお膝に抱かれて居て、其晩聞いたんだもの。だから夢ではない。

一駄助けて呉れたのは誰ですつて、母様に問ふた。私がものを聞いて、返事に躊

躇をなすつたのは此時ばかりで、また、それは猪だとか、狼だとか、狐だとか、頬白

だとか、山雀だとか、鮫鰈だとか鯖だとか、蛆だとか、毛虫だとか、草だとか、竹

だとか、松茸だとか、しめぢだとかおいひでなかつたのも此時ばかりで、そして顔の

色をおかへなすつたのも此時ばかりで、それに小さな声でおつしやつたのも此時ば

りだ。

そして母様はかうおいひであつた。

(廉や、それはね、大きな五色の翼があつて天上に遊んで居るうつくしい姉さんだよ)

第十一

(鳥なの、母様)とさういつて其時私が聴いた。

此にも母様は少し口籠つておいでゝあつたが、

(鳥ぢやないよ、翼の生へた美しい姉さんだよ)

何うしても分らんかつた。うるさくいつたらしまひにやお前には分らない、とさうおいひ

であつた、また推返して聴いたら、やつぱり、

(翼の生へたうつくしい姉さんだつてば)

それで仕方がないからきくのはよして、見やうと思つた、其うつくしい翼のはへたもの見
たくなつて、何処に居ますゝツて、せつツいても知らない、さういつてばかりおいでゝ
あつたが、毎日ゝあまりしつこかつたもんだから、とうゝ余儀なさゝうなお顔色

で、

(鳥屋の前にでもいつて見て来るが可)

そんならわけはない。

小屋を出て二町ばかり行くと直坂があつて、坂の下口に一軒鳥屋があるので、樹蔭も何にもない、お天氣のいゝ時あかるいゝ小さな店で、町家の軒ならびにあつた。鸚鵡なうむ、くるとした露のたりさうな、小さな眼で、あれで瞳が動きますね。毎日々々行つちやあ立つて居たので、しまひにやあ見知顔で私の顔を見て頷くやうでしたつけ、でもそれぢやあない。

駒はね、丈の高い、籠ん中を下から上へ飛んで、すがつて、ひよいと逆に腹を見せて熟柿の落こちるやうにぼたりとおりに餌をつゝいて、私をばかまひつけない、ちつとも気に懸けてくれやうとはしないであつた、それでもない。皆違つとる。翼の生へたうつくしい姉さんは居ないのツて、一所に立つた人をつかまへちやあ、聞いたけれど、笑ふものやら、嘲けるものやら、聞かないふりをするものやら、つまらないとけなすものやら、馬鹿だといふものやら、番小屋の嬢々に似て此奴も何うかして居らあ、といふものやら、皆獣だ。(翼の生へたうつくしい姉さんは居ないの)ツて聞いた時、莞爾笑つて両方から左

右の手でおうやうに私の天窓を撫で、行つた、それは一様に緋羅紗のづぼんを穿いた二人の騎兵で——聞いた時——莞爾笑つて、両方から左右の手で、おうやうに私の天窓をなで、そして手を引あつて黙つて坂をのぼつて行つた、長靴の音がぼつくりして、銀の剣の長いのがまつすぐに二ツならんで輝いて見えた。そればかりで、あとは皆馬鹿にした。

五日ばかり学校から帰つちやあ其足で鳥屋の店へ行つてじつと立つて奥の方の暗い棚の中で、コト／＼と音をさして居る其鳥まで見覚えたけれど、翼の生へた姉さんは居ないのでぼんやりして、ぼつとして、ほんとうに少し馬鹿になつたやうな気がしい／＼、日が暮れると帰り帰りました。で、とても鳥屋には居ないものとあきらめたが、何うしても見たくツてならないので、また母様にねだつて聞いた。何処に居るの、翼の生へたうつくしい人は何処に居るのツて。何とおいひでも肯分けないものだから母様が、（それでは林へでも、裏の田畝へでも行つて見ておいで。何故ツて天上に遊んで居るんだから籠の中に居ないのかも知れないよ）それから私、あの、梅林のある処に参りました。あの桜山と、桃谷と、菖蒲の池とある処で。

しかし其は唯青葉ばかりで菖蒲の短いのがむらがつて、水の色の黒い時分、此処へも二日、三日続けて行きましたつけ、小鳥は見つからなかつた。鳥が沢山居た。あれが、かあゝ鳴いて一しきりして静まると其姿の見えなくなるのは、大方其翼で、日の光をかくしてしまふのでしやう、大きな翼だ、まことに大い翼だ、けれどもそれではない。

第十二

日が暮れかゝると彼方に一ならび、此方に一ならび縦横になつて、梅の樹が飛々に暗くなる。枝々のなかの水田の水がどむよりして淀むで居るのに際立つて真白に見えるのは鷺だつた、二羽一処にト三羽一処にト居てそして一羽が六尺ばかり空へ斜に足から糸のやうに水を引いて立つてあがつたが音がなかつた、それでもない。蛙が一斉に鳴きはじめる。森が暗くなつて、山が見えなくなつた。宵月の頃だつたのに曇つたので、星も見えないで、陰々として一面にものゝ色が灰のやうにうるんであつた、蛙がしきりになく。

仰いで高い処に朱の欄干のついた窓があつて、そこが母様のうちだつたと聞く、仰

いで高い処に朱の欄干のついた窓があつてそこから顔を出す、其顔が自分の顔であつたんだらうにトさう思ひながら破れた垣の穴ん処に腰をかけてぼんやりして居た。

いつでもあの翼の生へたうつくしい人をたづねあぐむ、其昼のうち精神の疲労ないうちには可んだけれど、度が過ぎて、そんなに晩になると、いつもかう滅入つてしまつて、何だか、人に離れたやうな世間に遠ざかつたやうな気がするので、心細くもあり、裏悲しくもあり、覺束ないやうでもあり、恐ろしいやうでもある、嫌な心持だ、嫌な心持だ。

早く帰らうとしたけれど気が重くなつて其癖神経は鋭くなつて、それで居てひとりであくびが出た。あれ！

赤い口をあいたんだなど、自分でさうおもつて、吃驚した。

ぼんやりした梅の枝が手をのばして立つてゐるやうだ。あたりを睭すと真くらで、遠くの方では、ほう、ほうツて、呼ぶのは何だらう。冴えた通る声で野末を押ひろげるやうに、啼く、トントントントンと餌にあたるやうな響きが遠くから来るやうに聞こえる鳥の声は、梟であつた。

一ツでない。

ふた 二ツも三ツも。私に何を談すのだらう、私に何を談すのだらう、鳥がものをいふと慄然として身の毛が慄立った。

ほんとうに其晩ほど恐かつたことはない。

蛙の音がますます高くなる、これはまた仰山な、何百、何うして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があつて、口があつて、足があつて、身軀があつて、水中に居て、そして声を出すのだ。一ツ一ツトわなゝいた。寒くなつた。風が少し出て樹がゆつさり動いた。

蛙の音がますます高くなる、居ても立つても居られなくツて、そつと動き出した、身軀が何うになつてゐるやうで、すつと立ち切れないで蹲つた、裾が足にくるまつて、帯が少し弛むで、胸があいて、うつむいたまゝ天窓がすはつた。ものがぼんやり見える。見えるのは眼だトまたふるえた。

ふるえながら、そつと、大事に、内証で、手首をすくめて、自分の身軀を見やうと思つて、左右へ袖をひらいた時もう思はずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。何んなに恐かつたらう。

此時背後から母様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私何うしたんだか知れませ

ん。其はおそくなつたから見に来て下さつたんで泣くことさへ出来なかつたのが、

「母様——」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟元へかぢ

りついて仰向いてお顔を見た時、フツト気が着いた。

何うもさうらしい、翼の生へたうつくしい人は何うも母様であるらしい。もう鳥屋に

は、行くまい、わけてもこの恐い処へと、其後ふつゝり。

しかし何うしても何う見ても母様にうつくしい五色の翼が生へちやあ居ないから、ま

たさうではなく、他にそんな人が居るのかも知れない、何うしても判然しないで疑はれ

る。

雨も晴れたり、ちやうど石原も迂るだらう。母様はあゝおつしやるけれど、故とあ

の猿にぶつかつて、また川へ落ちて見やうか不知。さうすりやまた引上げて下さるだらう。

見たいな！翼の生へたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可、母様が居らつし

やるから、母様が居らつしやつたから。(完)

(「新著月刊」第一号 明治30年4月)

青空文庫情報

底本：「短篇小説名作選」岡保生・榎本隆司 編、現代企画室

1982（昭和57）年4月15日第1刷発行

1984（昭和59）年3月15日第2刷

※文字づかい・仮名づかいの誤用・不統一、促音「っ」「っ」の小書きの混在は底本のままとしました。

※「猪子《いぬし》して」に「ママ」の注記」は、底本では、「猪《いぬし》子して」に「《して》に「ママ」の注記」となっていますが、初収録単行本「柳筥」では「猪《いぬし》子にして」となっているため、上記のように改めました。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2003年4月10日作成

2013年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

化鳥

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>